

保育園における気になる子を対象とした保育カンファレンス — 保育目標を明確にする実践の取り組み —

佐藤 智恵

Conference for child anxious in the nursery

— Attempt of practice to clarify the childcare goal —

Chie Sato

要 旨

本研究の目的は、担任保育者から挙げられた1名の男児を対象としたカンファレンスを通し、対象児の保育目標を明確にすることによって得られる保育者の気づきを明らかにすることである。方法は、カンファレンスの中で、担任保育者の保育に対する気づきや、対象児に対する考えが表出している発言について抽出し、分析の対象とした。その際、発言者の気づきの背景となるものを明らかにするために、発言の前後の文脈やその発言に至るまでの経緯を重視し、カンファレンスの流れを描き出した。その結果、保育者は気になる子どもの保育目標を設定する際に、その姿のどこに注目すればいいかという点に戸惑いを感じていたようである。対象児の困難さのうち1点に焦点化し、一日わずかの量でも同一の視点により継続的に記録を行うことで、子どもの変化に気付くことが可能となった。

キーワード：気になる子 カンファレンス 保育目標

I. 問題と目的

保育所における障害児保育は1970年代より制度化され^(注1)、70年代後半には障害児の入所入園が急増している（水野, 2012）。厚生労働省（2012）の調査によれば、平成22年（2010）、障害児を受け入れている保育所数は全国で7,221か所、障害児保育対象の子どもは11,080人、軽度の障害を含む障害児の受け入れ総数は、45,369人となっている。文部科学省から「21世紀の特殊教育の在り方について」が出される前年の2000年には、障害児を受け入れている保育所が6,249か所、受け入れ人数が9,537人であったことから、微増を続けているようである。

保育所における障害児保育には約40年の歴史が

あるが、特別支援教育への転換から、様々な状況が変化してきていることが予想される。例えば、郷間ら（2008）は、診断はされていないが特別な配慮を必要としている子どもが保育所・幼稚園に数多く存在していることを報告している。また、そのような場合、保護者が我が子の障害を認められないために療育を受けず、保育所のみで支援を行うケースも一定する存在する（中島ら, 2012）。

このように、保育所には障害のある子どもも、診断名はないものの「気になる子」と言われる子どもが在籍しているが、彼らの保育について保育者はどのように捉えているのであろうか。石井（2010）は、保育所・幼稚園で働く保育者を対象として、多くの保育者が実践の中で、障害の有無

にかかわらず子どものたちの成長を認識し、やりがいを感じると回答する一方、障害のある幼児への対応や学級経営への不安を抱え自信が持てないと感じる保育者が多いことを報告している。また、神長（2005）は、「気になる子」を担当する保育者は、その対応やクラスのまとまりのなさを自らの保育実践力の低さとして捉え、自信喪失となるケースがあることを指摘している。吉兼ら（2010）によって、保育者が注意欠陥多動性障害（ADHD）に関しては、その障害特性について十分理解しているものの、知識があってもその子どもの対応には困難さを感じていることが報告されるなど、その対応に苦慮する保育者が多くいることがうかがい知れる。その背景として、保育者にはクラス運営を全体的な視野に立って進めつつ、個々の子どもの発達を多面的に援助していくことが求められているということが言える（長根,2006）。

一方、笹森ら（2010）は、子どもに特別な支援が必要だと気づいた時期について調査を行い、1歳半や3歳児の乳幼児健診や就学前健診時での気づきがあったものが50人であったのに対し、保育所・幼稚園での保育中では446人と、2つに大きな差があったことを報告している。このことから、保育実践において多くの定型発達の子どもたちを保育してきた保育者の子どもを観る視点という専門性の高さがうかがえる。

保育所保育指針（厚生労働省、2008）では、障害のある子どもへの個別の指導計画の作成についても記され、その必要性に言及している。個別の指導計画の作成に関しては、金ら（2008）が公立幼稚園において特別な教育的支援がいかになされているかを37か所の都道府県庁所在地市・区の教育委員会で質問紙調査を行なった。その結果、幼稚園に対して「個別の指導計画」の作成を求めている教育委員会は7市（21%）のみであった。文部科学省が行った調査（2011）では、幼稚園（国立・公立・私立含）での支援計画作成は、2007年には22.1%、2010年では37.0%となっており、徐々にではあるが広がりを見せていると言える。保育

所での個別の指導（支援）計画作成に関しては、現在のところ全国的な調査研究は散見されず、わずかに取り組みが見られるのみである（中島、2011；中村、2012）。

保育所・幼稚園での個別の指導計画の作成について、原野ら（2009）は、保育者が「作成する時間がない」「作成する方法が分からない」と感じていることを、前述の金ら（2008）は、子どもの的確な発達課題や目標や支援案を引き出す作業に困難が生じていることを指摘している。このように保育者にとっては個別の指導計画を作成すること自体が障壁となっているようである。そのような中、吉川（2014）は、個別の指導計画でどのような目標を立てるかということには、特別な支援を必要とする幼児に対して保育者が抱く発達課題が反映されると述べ、目標設定の重要性に着目している。保育者は保育目標の設定においてどのようなことに困難さを感じているのだろうか。保育者が的確な目標設定が行えることは、子どもにとって重要であるだけでなく、保育者にとっても、保育の質の向上や、作成時の負担感軽減などに繋がっていくのではないだろうか。

そこで本研究では、担任保育者から気になる子として挙げられたある1名の男児を対象としたカンファレンスを通し、対象児の保育目標を明確にすることによって得られる保育者の気づきを明らかにすることを目的に研究を行う。

Ⅱ. 方法

本研究では、カンファレンスの中で、担任保育者の保育に対する気づきや、対象児に対する考えが表出している発言について抽出し、分析の対象とする。その際、発言者の気づきの背景となるものを明らかにするために、発言の前後の文脈やその発言に至るまでの経緯を重視し、カンファレンスの流れを描き出すものとする。

（1）カンファレンスの対象児

カンファレンスの対象児は、私立A保育園に在籍している、ある一名の男児である。3歳児クラ

ス（28名）の担任保育者B（保育経験21年目）・保育者C（保育経験8年目）から、気になる子として挙げられた男児（以下、男児Dと記す。観察開始時に4歳4か月であった）である。男児Dは、3歳児クラスでA保育園に入園する以前は、家庭で過ごしていた。入園当初から他児とかかわることが苦手、集団での活動に参加しないなどの様子が見られたということであり、8月中旬までは、保育室で過ごすことが嫌になると、園長や事務員など複数名大人のいる事務室にやってきて、そこで数時間から半日過ごすことが度々であった。なお、男児Dは市の3歳児健診において、社会性の困難さがあることを指摘され、入園後にも、保護者・保健師・園側で連絡が取られている。担任保育士によると母親は、男児Dの文字や数字への理解が高いことから、我が子の発達についてそれほど気にしていない様子とのことである。

（2）カンファレンス開始までの経過

男児Dの発達を客観的に明らかにするために、まず、乳幼児発達スケール（KIDS）タイプTを実施した。KIDSのプロフィールは、本研究の目的とは直接関係がないために、本稿では詳細を掲載しないが、「運動」と「社会性（対子ども）」に関して困難さが見られる一方、「言語理解」の項目については年齢相応の発達であった。併せて、男児Dの得意なことや苦手なことなどについて担任保育者B・Cに記述をしてもらった。そこでは、基本的生活習慣はほぼ獲得済み、言語面の理解や表出についてはそれほど大きな問題が感じられない、粗大運動・微細運動ともに苦手、数字や文字・時計に非常に高い関心を示していることが挙げられた。2名の担任は、男児Dの様子についてはほぼ共通した認識を持っており、男児Dだけでなく担任している子どものことを日常的に話す機会があるということである。また、保育士としての経験年数が保育者Bは21年、保育者Cは8年とその経験には差があるものの、子どもに関することや保育に関することについては、ざっくばらんに思っていることを話している姿が見受けられた。

（3）カンファレンスの参加者や期間など

カンファレンスには、2名の担任保育者（保育者B、保育者C）、主任保育者、園長、筆者の5名である。カンファレンスは201X年10月から開始し、園内にある相談室にて実施した。カンファレンスの開催頻度は、月1回（60分間程度）とし、その進行は筆者が行った。カンファレンスでは、筆者が作成した「保育目標シート（写真1）」を用い、男児Dの1か月間の変化についてそれぞれが感じていることなどを話し合った。具体的な方法としては、参加者全員に1枚ずつ前月の「保育目標シート」を配布し、シート内の4つの項目（【好きになったこと、得意なこと】、【身に付いたこと】、【援助を必要としていること】、【できそうなこと】）に該当する男児Dの姿や、男児Dと他児の関わりの様子、また参加者自身の気づきなど挙げ、シートにそれぞれがメモしながら話し合いを行った。次に、その中から翌月の男児Dの保育目標を話し合い、設定することとした。その際、進行係としての筆者の主たる役割は、必要に応じてそれぞれの発言を確認したり、話し合いが行き詰ったと思われる際に、新たな疑問点などを提示したりする役割を担うものとし、園長などの管理職や筆者が、解決方法の提示を行う場所ではないことを参加者全員で確認した。また、カンファレンス終了時に筆者が、それぞれの項目に関して、その日に出た意見を読み上げ、内容の不足や勘違いなどがないかを確認した。また、カンファレンス終了後、筆者はその日に出た意見や翌月の目標などを「保育目標シート」に加筆修正し、翌週、参加者全員に配布し共通認識を持てるようにした。また、カンファレンスでどのような発言が行われたかを明確にするためという使用目的を伝え、参加者全員の同意を得た上で、カンファレンスの発言の模様をICレコーダにて採録した。

カンファレンスに併せて、筆者は同年9月中旬より、週1回3歳児クラスを訪れ、男児Dの観察を行った。カンファレンスは、その観察記録も用いて実施した。観察時間は、9時から11時30分、10時から13時というように日によって変化させ、

保育目標シート																					
記入年月日		平成		年		月		日													
クラス		年齢	4	男	性	男	氏名		担任												
<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">本児の様子・状態</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>【好きなこと・得意なこと】</td> <td>【今についていること】</td> <td>【困りを覚えていること（ニーズ）】</td> <td>【できそうなこと（実況）】</td> </tr> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・数字、文字、時計に興味あり ・絵本を読むこと </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・おはよその礼儀的挨拶習慣が身についている。喜がよすく見えず、手でかくることがある。 ・友達とのかかわりがよすく見えず、かたがたしている。 </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・「困り」を覚えていること（ニーズ） ・「おはよす」に反応する。能力が低い。 ・指差しを使うことが若干（おはよす、のり、筆）がよすく見えない。 ・時々、集団から離れて他児へ行く。 ・本調子で話したり、会話が成り立ちにくい。 ・いざればなどのルールがわからないう。 </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・手拍をしつかり使う ・お作をしつかり読む </td> </tr> </tbody> </table>										本児の様子・状態				【好きなこと・得意なこと】	【今についていること】	【困りを覚えていること（ニーズ）】	【できそうなこと（実況）】	<ul style="list-style-type: none"> ・数字、文字、時計に興味あり ・絵本を読むこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・おはよその礼儀的挨拶習慣が身についている。喜がよすく見えず、手でかくることがある。 ・友達とのかかわりがよすく見えず、かたがたしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「困り」を覚えていること（ニーズ） ・「おはよす」に反応する。能力が低い。 ・指差しを使うことが若干（おはよす、のり、筆）がよすく見えない。 ・時々、集団から離れて他児へ行く。 ・本調子で話したり、会話が成り立ちにくい。 ・いざればなどのルールがわからないう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手拍をしつかり使う ・お作をしつかり読む
本児の様子・状態																					
【好きなこと・得意なこと】	【今についていること】	【困りを覚えていること（ニーズ）】	【できそうなこと（実況）】																		
<ul style="list-style-type: none"> ・数字、文字、時計に興味あり ・絵本を読むこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・おはよその礼儀的挨拶習慣が身についている。喜がよすく見えず、手でかくることがある。 ・友達とのかかわりがよすく見えず、かたがたしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「困り」を覚えていること（ニーズ） ・「おはよす」に反応する。能力が低い。 ・指差しを使うことが若干（おはよす、のり、筆）がよすく見えない。 ・時々、集団から離れて他児へ行く。 ・本調子で話したり、会話が成り立ちにくい。 ・いざればなどのルールがわからないう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手拍をしつかり使う ・お作をしつかり読む 																		

写真1 保育目標シート（一部分）

戸外遊び、集まりや集団活動、食事、睡眠という園生活での様々な男児Dの姿が観察できるように配慮した。また、担任保育者とは、1週間の男児Dの様子や、観察をして感じたことなどを話す機会を数分間でも持つようにした。

Ⅲ. 結果と考察

（1）第1期（第1回目、第2回目）

カンファレンスは10月より計6回実施した。第1回目のカンファレンスでは、男児Dが「集団での遊びに参加しづらい」理由として、「対人面での困難さ」だけでなく、「身体を使う経験の乏しさから生じる遊べなさ」ではないかという話題になった。そこで、11月の目標として「身体をしっかり使う」が挙げられた。

第2回目のカンファレンス（11月）では、11月の目標に関する男児Dの様子を確認したものの、保育記録には記載のない日も多く、そこに表出する男児Dの姿は、2名の担任保育者の「なんとなく」という曖昧な記憶や、共通して認識された特徴的な出来事のみになっているようであった。また、12月の目標を「箸を使って食事をする」「集団での全身を使った遊びに参加する」と設定したものの、保育者Bは男児Dの保育目標の設定に困難さを感じている様子うかがえた。筆者がそのことについて尋ねると、保育者Bは「う～ん…どう目標を設定すればいいかが…難しいんよね。こういうことをやってみたいと思っているんですけど…保育の中でD児自身が困っていることがある


と思うんですけど…それはすごく思うんですね。でも、保育目標を設定しようと思うと、それではダメだと思うんですけど、どうしても自分が困っている状態への改善に気持ちが向いてしまうんです。」という発言があった。保育者Bは、男児Dが過ごしやすい保育がしたいと考えており、そのために「自分ができることはやりたい」と非常に前向きな姿勢でこのカンファレンスにも参加していた。日常の保育業務でも月案や週日案などの立案が存在することから、保育士としての経験も豊かな保育者Bにとって、それはそれほど大きな負担ではないと推測される。ところが、男児Dの保育目標の設定という具体的なことについては、困難を感じているようであった。このことから、保育者Bが、「男児Dの困難さ」ということよりも、無意識的に「集団の中で男児Dの困難さ」というものに着目し、それに対峙しようとしていることがうかがえる。保育実践は「集団での生活を経験する」と「一人ひとりを大切にすること」の双方を重視する営みである。しかし、それは、「男児Dの困り感」を解決しようとする、男児Dが集団から外れることに繋がることが予測され、集団生活のよさを経験しづらくなること、或いは男児Dの困り感を解消することから生起する「集団としてのクラスのまとまり」の形成が難しくなるのではないかという危機感があったのかもしれない。保育者は気になる子を保育する際に「クラス運営上の困難さ」を感じる経験をしていることが推測できる。

2回目までのカンファレンスが終了した段階で、これまで使用していた「保育目標シート」だけでは、保育者にとって、多忙な日常の保育実践の中で保育目標を意識することや男児Dの様子を記憶することへの困難さがあると考えられた。そこで、保育目標に関する男児Dの様子を記録する「記録表」(写真2)を新たに作成し、記入を依頼した。「記録表」の内容は、男児Dの様子の変化などが一目で認識可能なように、目標とする姿が見られたかどうかを「○・×・△」で表す欄とともに、「できた/できない」だけでなく「どのような様子が見られたか」という質的な面からも検討できるように、短い文章で記す記述欄も設けた。担任保育者らの負担増加を防ぐために、1日分の記録を3cm×4cmの小さい枠にし、記述できるようにした(1か月でA4用紙一枚)。また、保

[illegible]


「記録表」の内容としては、担任間で男児Dの姿の捉えが異なる日が見られた。具体的には、保育者Bが目標としている行動ができたと捉え「○」をつけている同じ日に、保育者Cは「△」をつけているということであった。保育者Cは自らそのことについて言及し、「私、厳しいのかなあ」と自らの保育姿勢についての発言が見られた(写真3、4)。これまでのカンファレンスや観察時の

保育者Cの発言は、保育者Bとそれほど大きく異なるということではなかった。しかし、今回の「記録表」の記述では、子どものどの行動にどう注目したかということから、それぞれの保育者の考え方や捉え方が現れるものとなった。保育者Cにとって男児Dの記録を記述し、カンファレンスにおいて他の保育者らと話しをすることで、自らの保育行為をふり返り、気づきが得られた機会となったと考えられる。



3	25日	①	②	3	26日	①	②	3
1. フリマヤの物は、着て みる。 2. 段々で休むとわかんない。 (電車に乗った。)					1. 声を出さずに遊ぶ。 2. なかむと遊ぶ。跳んで ぶつかる。			

写真3 保育者Bのある日の記録表



25日	△	△	3	26日	△	△	3
上の森公園へ散歩 ちゃんけんを乗せた。				おかきものごっこ 「おかしな」おかしな おかしなやつはいい。 着て出ている。			
4月	1	2	3	4月	1	2	3

写真4 同じ日の保育者Cの記録表

1月の目標について話が及ぶと、保育者Cから「まだ×の日もあるけれど、△も増えていて、もう少ししたら別の姿が見えるようになって思うので、引き続き同じ目標にしたい」という意見があり、他の参加者からも同意が得られた。前回までは、子どもの具体的な姿については担任保育者から多く発言が見られたものの、目標については自発的な発言がほとんど見られなかったのだが、記録表に男児Dの姿を日々記述することで、目標設定が行いやすくなったのかもしれない。

第4回目のカンファレンス（1月）では、保育者Bから「年明けからの記録をつけていく中で、D児の様子が変化しているように感じていて、『集団での遊びへの参加』という目標は、今のD児に必要なことではないのかと思うようになった」

との発言があった。具体的には、これまでは男児Dが集団の中で過ごすということに注目をしていたものの、その姿がある程度見られるようになったため、男児Dが一人で過ごしていてもそれほど気にすることでないと感じるようになったということである。そのことに関して参加者からは「他児と過ごすことでD児の世界が広がりつつあるのだから目標は継続した方がいい」という意見や、「集団で遊ぶという行動をしない日があっても構わない」など様々な意見が挙がった。その中で保育者Cから「最近、観ていて感じるんですけど、楽しそうやし平気な様子で他児と過ごしているんですけど、嫌なことがあると相手を叩いたり、大声を出すことが見られるようになったなあ…」という発言があった。保育者Cは、男児Dの姿をただ漠然と見ているのではなく、「嫌なことがあった時に叩いたり、大声をだしたりする」という男児Dの行動の背景を上手く掘み取り言語化した。このことにより、以前よりも集団活動に参加するようになった男児Dではあるものの、他児と過ごすことには少なからずストレスがあることを参加者全員が理解した。

そのことをきっかけとし、目標を大きく変更することが決定された。目標の候補として「友達と仲良くする」「大声を出さない」などが挙がったが、主任保育者から「D児のことを考えると、『やめて』と言えることが大事ではないか」という考えが述べられた。それを受け、担任保育者2名からは、「『言ってごらん』と促すのではなく、落ち着けるように横について体に触れたりする方法で関わってみたい」という内容のことが話され、2月の目標が決定した。

第5回目のカンファレンス（2月）では、男児Dの体調不良が続き欠席が多かったり、表現会での劇遊びを本児なりに楽しみ参加したために、「やめて」というような場面がほとんどなかったということで、3月も引き続き同様の目標設定とした。

第6回目のカンファレンス（3月）では、保育目標に関することでは、保育者2名とも友達を叩く男児Dの姿が多く記述されており、現段階では

言葉で気持ちを伝えることは困難ということであった。この目標については、男児Dの体調不良から生じた状態の変化が見られたことや、実施期間の短さなどから、十分な検討を行うことが出来なかった。

取り組み全体のまとめとしては、担任保育者からは保育目標を明確にし、記録したことで、子どもの何を観るのかという視点が意識しやすくなったことが挙げられた。園長、主任からは、普段ゆっくりと保育実践について話す機会が持ちづらいが、カンファレンスの場で話をすることで、それぞれの保育者が自らの保育実践を考える時間が設定でき、それが保育実践での子ども理解につながっていると感じたことが話された。

Ⅳ.まとめ

本研究では、カンファレンスの最後の時期(2、3月)に対象児の体調不良などが続き、目標設定の十分な検討が行えず、目標を明確にすることでの子どもの変容という部分にまで踏み込むことが出来なかった。しかし、保育者にとっては、目標を設定し子どものある姿に焦点化することは、子どもの姿の一側面を明らかにすることとなった。

本研究において保育者は、気になる子どもについての保育目標を設定する際に、その姿のどこに注目すればいいかという点に戸惑いを感じたようである。保育者は、子どもを「気にする」あまりに、色々なことに困難さがあると感じ、「子どもの困難さ全てを対象としなくてはならない」と捉えがちになるということが考えられる。しかし、対象児の困難さのうち1点に焦点化し、一日わずかの量でも同一の視点より、継続的に記録を行うことで、子どもの変化に気づくことが可能になった。保育目標を設定することは、子どもにスキル獲得のための指導をすることや、できないことに焦点化しできるようにするためだけのものではなく、保育者自身の子どもの観る力を高めることにつながるという意義があると言える。

今回は、気になる子どもの保育実践において、保育目標を設定するという試みを行った。しか

し、本来的には気になるや特別な支援を必要とする子どもだけでなく、担任する全ての子どもにそれぞれに適した保育目標を設定することが必要であろう。

保育実践においては、乳児以外の個人の目標設定はそれほど行われていないものの、それぞれの保育者の中に「A児にはこうなってもらいたい」というような願いやねらいは存在すると思われる。しかし、現在の保育者定数の基準では、1人の保育者が見る子どもの数が多く、一人ひとりの今月の目標ということを明文化するには負担が大きいことが考えられる。保育の目標を設定する上で、保育者のもつ専門性や力量が十分表出できるような、保育計画の方法を検討することが必要であるだろう。

注1) 障害児保育の制度化について、厚生省は、1974年に「障害児保育事業実施要綱」を公布している。

引用文献

- 原野明子・朴香花・佐藤拓・鶴巻正子(2009) 福島県内の幼稚園における個別の指導計画作成の現状. 福島大学総合教育研究センター紀要(7), 93-101.
- 吉川和幸(2014) 私立幼稚園に在籍する特別な支援を要する幼児の個別の指導計画に記述される「目標」に関する研究北海道大学大学院教育学研究院紀要(120), 23-43.
- 郷間英世・圓尾奈津美・宮地知美・池田友美・郷間安美子(2008) 幼稚園・保育園における「気になる子」に対する保育上の困難さについての調査研究. 京都教育大紀要, 113, 81-89.
- 石井正子(2010) インクルーシブ保育に関する保育者の認識. 乳幼児教育学研究, 19, 109-120.
- 神長美津子(2005) 支援のための取組(1) 幼稚園・保育所における取組. 無藤隆・神長美津子・河村久・柘植雅義編著, 「気になる子」の保育と就学支援. 東洋館出版, 14-17.

- 金珍熙・園山繁樹（2008）公立幼稚園における障害幼児への特別支援体制に関する調査研究－教育委員会担当職員への質問紙調査－.特殊教育学研究, 45（5）, 255-264
- 厚生労働省（2008）保育所保育指針 平成20年告示. フレーベル館, 24.
- 厚生労働省（2012）全国児童福祉主幹課長会議資料
- 水野恭子（2012）障害児保育の歩みとこれからの障害児保育実践に向けて.愛知教育大学幼児教育研究, 第16号, 77-82.
- 文部科学省（2011）平成22年度特別支援教育体制整備状況調査.
- 長根利紀代（2006）保育実践における子どもの発達と保育者の能力についての一考察－折り紙「柿」を通して－. 名古屋柳城短期大学研究紀要, 28, 107-124.
- 中島正夫・竹尾見子・谷野亜美（2012）保育所に通う発達障害を持つ子ども・「気になる子」の状況について. 椋山女学園教育学部紀要, 5, 69-80.
- 中島正夫（2011）保育所（園）に通う障害を持つ子どもに関する「個別の支援計画」策定状況などについて.椋山女学園大学研究論集自然科学篇（42）, 13-25.
- 中村みゆき（2012）発達障害と地域支援（2）気になる子どもの子育て支援：保護者と子どもの架け橋になったM保育所での「CLMと個別の指導計画」を活用した支援.子育て支援と心理臨床 6, 124-128.笹森洋樹・後上鐵夫・久保山茂樹・小林倫代・廣瀬由美子・澤田真弓・藤井 茂樹（2010）発達障害のある子どもへの早期発見・早期支援の現状と課題.国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 37, 3-15.
- 田代和美（1996）保育者が自分の価値観を見つめ直すために. 幼児の教育, 26-32.
- 吉兼信子・林隆（2010）特別支援教育時代における保育士の業務上の保育困難感について. 山口県立大学学術情報. 第3号大学院論集, 81-87.